サークル　愛川自然観察会通信

愛川の自然　第24号

平成27年12月31日（月）発行

愛川町郷土資料館

・サークル愛川自然観察会共催

企画展

「愛川町の植物～最近の話題」

11月29日まで行われていた愛川町郷土資料館企画展「愛川町の植物～最近の話題～」が終わりました。この企画展は、愛川町周辺の自生植物について最新情報を紹介するとともに、最近の話題を提供しようとするものでした。

展示内容は、○誰でも調査に参加できる標本のつくり方、○中津川の河川敷等に見られる旺盛な繁殖力を持つ外来種、○かっての中津渓谷に生育していた渓岸植物のうち下流域にかろうじて残っている貴重種の植物、○あいかわ公園内で見られる秋の植物、のコーナーを設けて、植物標本と写真によって説明したものでした。多くの入館者があり、関心を持って観て頂けたようです。

現在、神奈川県植物誌調査会によって全県的に植物調査が行われています。この調査の目的は、神奈川県内における植物相の実態を明らかにすることと、過去の調査データとの比較を通して外来種の影響などによる自然の移り変わりを明らかにすることにあります。平成17年を目途に進められ、調査結果は神奈川県植物誌2017として刊行される予定です。愛川町郷土資料館はこの調査の拠点施設として参加しています。

現在、愛川町資料館に収蔵されている標本は次の通りです。調査協力者は14名です。

分類群	科数	標本数
シダ植物	24	697
裸子植物	6	38
単子葉植物	23	2314
離弁花類	85	3432
合弁花類	36	1992
コケ植物	1	2
藻類	1	1
合計	176	8476

なお、企画展に関係して展示内容を紹介した講座も開催されました。話者はサークル愛川自然観察会代表の山口が務めました。多くの方に受講していただき、会場はほぼ満員になりました。

活動報告

2015.9～2015.12

県立あいかわ公園9月自然観察ガイド　9月27日（日）テーマ；秋の七草をさがそう！　参加者；10名

八菅山いこいの森　秋の自然観察会　10月10日（土）テーマ；秋の自然観察路を歩こう　参加者;7名

愛川町郷土資料館企画展（サークル愛川自然観察会共催）　10月10日（土）～11月29日（日）　テーマ；愛川町の植物～最近の話題～

愛川町郷土資料館企画展　講座　11月7日（土）テーマ;「愛川町の植物～最近の話題～」　参加者;20名

あいかわ公園10月の自然観察ガイド　10月18日（日）テーマ；ドングリ拾いをしよう！　参加者15名

愛川町ふるさとまつり　出展　10月25日（日）場所；愛川町役場構内　テーマ；活動ＰＲ、小物販売　会員参加者；7名

第95回観察会　会員交流会(厚木植物会と合同事業)　10月31日(土)　場所；山口ガーデン　テーマ；収穫体験、コンニュクづくり他、交流会、ミニ観察会　参加者22名

第96回観察会　愛川ふれあいの村紅葉祭　11月8日(日)　テーマ；ミニ観察会及び小物販売　会員参加者；5名

あいかわ公園11月の自然観察ガイド　11月22日（日）　テーマ；自然観察路を歩こう　参加者;8名

第97回観察会　11月28日（土）場所；高取山　テーマ；高取山山頂でお弁当を食べよう　参加者；7名

あいかわ公園12月の自然観察ガイド　12月20日（日）　テーマ；冬越しする生きものを探そう！　参加者;11名

見どころスポット

その10：「　向山尾根ハイキングコース　」

半原地区の北方に東西に連なる山を向山（むこうやま）と言います。東の端の富士居山(愛川中学校の裏山)から西の端の大峰(津久井町韮尾根寄りの峰）まで尾根続きにおよそ3kmのハイキングコースが整備されています。昔のような山仕事が行われなくなって歩く人も途絶え、長い間消滅寸前だった山道を、愛川山岳会の尽力により整備が行われ、ハイキングコースとして復活し、案内板も設置されています。

木々の間から半原地区の集落や仏果山地一つの視野で捉えられ、また、宮ケ瀬ダムサイトや県立あいかわ公園も壮観な姿を見せ、精巧なジオラマを視ているように眺められます。

この尾根コースまでの登り口は半原側に3つ、反対側の志田峠側に2つ、富士居山と津久井の清正光(朝日寺)のそれぞれにもありますが、いずれも急な傾斜を登らなくてはならず、やや健脚者向きと言ったところです。市街地とは隔絶した多様な森林が続き、明るい陽の注ぐ空間もあり、小鳥の鳴き声や動物の生活痕が観察され、森林浴としてフィットチッド（生物活性物質）が発散するコースで、一度は歩いてみたいコースです。

・身近な自然・

NO7：ヒダリマキマイマイ（左巻蝸牛）

カタツムリには、右巻きと左巻きの種類があるのはご存知でしょうか。愛川・清川では右巻きの種類が多く雨上がりによく見かけるミスジマイマイという種類が代表的である。左巻きには林や草原などに生息するヒダリマキマイマイという種類がいる。

巻き方の向きは、貝殻の入り口が正面に見えるように置き、貝殻の中心より右側に入り口があれば「右巻き」、左側にあれば「左巻き」の種類となる。また、上から見て時計回りの渦が右巻き、反時計回りが左巻きと見分けてもいい。カタツムリを見つけたら観察してみてください。今まで気付かなかったカタツムリに出会えるかもしれません。

カタツムリの貝殻の表面にはキチン質でできた殻皮と呼ばれる薄膜があり、石灰質で出来た殻の表面を覆っている。殻皮は殻本体を保護するのが役目であるが、汚れが付き難くする役目、色によって殻を背景にとけ込ませる保護色の役目等があると言われている。汚れが付いたカタツムリを見かけないのはこのためだ。

ヒダリマキマイマイは殻の径が5㎝位のものがある。色は暗褐色で渦に沿って一筋の線模様がある。樹木の樹皮に付いている藻類やキノコ等を食べているようだ。

トンボ池の生きもの調査

八菅山いこいの森の青空博物館の一つであるトンボ池の生きもの調査を、水生生物に造詣の深い諏訪部晶氏の協力を得て2回行いました。以下、調査結果をご報告します。

1回目は4月28日にトンボ池とトンボ池の奥の金網で仕切られた山側とに分けて調査しました。2回目は9月14日にトンボ池の奥の金網で仕切られた池とカエル池と呼ばれる広場の奥の湧水池を調査しました。

	場　所	種	おもな生きもの
4/28	トンボ池	3種	コイ、アカミミガメ、ヒメタニシ、アメリカザリガニ他
	金網の奥池	23種	モツゴ他魚類、トンボ幼虫、カエル類、トビゲラ類、エビ類、サワガニ、アメリカザリガニ他
9/14	金網の奥池	12種	コイ、アメリカザリガニ、ツチガエル、フナsp、ヌカエビ他
	カエル池	11種	アメリカザリガニ、マメゲンゴロウ、イモリ、トンボ類の幼虫他

自然の生きものを生きたままの姿で観察できる池として作られたものですが、トンボ池は雑食性で繁殖力の旺盛なコイとミシシッピアカミミガメによって捕食されたためか自然の生きものは確認できなかった。

フェンスの奥の池は4月の調査では多くの生きものの生息が確認できたが、その後コイが侵入したためか、種類も数も減り、水質の悪化に強い生き物も確認されるようになった。

カエル池はアメリカザリガニが多いものの、トンボの幼虫類やマメゲンゴロウ、イモリなどが確認でき、コイやアカミミガメの影響がない池として多様な生きものを育んでいることが分かった。

愛川町が生物多様性の保全の趣旨に通じる施設を先駆的に整備してきたことは他に誇れるものであるが、外来種やペットの投棄によってトンボ池の生態系の攪乱が進行していて、この施設の本来の目的からは遠い存在となっている。在来の生きものが棲息する池として保全できるように、愛川町との協働事業のパートナーとして、微力ながら努力していきたいと考えています。

他団体の活動！！

さがみ自然フォーラム

2016年2月11日（木・祝）～15日（月）　アミューあつぎ5階ギャラリーで、第15回さがみ自然フォーラムが開催されます。一昨年来厚木市の生物多様性あつぎ戦力の啓発事業として厚木市とも連携しています。また、今年は主催者の一つであるＮＰＯ神奈川県自然保護協会の発足 50 周年の記念イベントとしておこなわれます。

サークル愛川自然観察会は、フォーラム運営委員会の構成メンバーになっています。また、代表の山口がＮＰＯ神奈川県自然保護協会の理事を務めています。会員の皆さんにはこれらの団体や活動に関心を持っていただいてご協力をいただければ幸いです。フォーラムの内容は、①企画展：野生の生きものとどう付き合うか、②神奈川県生物多様性ホットスポット、③県内自然保護団体のパネル展示、④江戸家猫八師匠に自然の保護に関する講演があります。

サークルからのお知らせ

1、身近での発見や観察記録など、本通信やホームページへの投稿をお願いいたします。手紙、電話、ファクス、メールでも結構です。できれば写真も添えていただければ幸いです。写真だけの記録でもＯＫです。

2、サークルからのお知らせは可能な限りメールでお伝えすることになっています。メールアドレスをお持ちの方は代表までお知らせください。
なお、不定期でのお知らせになりますので、時々メールボックスをご覧いただきたき、受信をご確認ください。
サークル愛川自然観察会のホームページでも同じ内容が確認できますので、こちらもときどき覗いていただきたいと思います。

サークル愛川自然観察会通信　愛川の自然
NO24号　　2015-12-31 発行
E-mail：ya1ma1gu0chi4@ksh.biglobe.ne.jp
http//www7b.biglobe.ne.jp/~aikawashizenkansatu/
編集人：山口勇一　Tel・Fax：046-281-1891

あいかわの自然誌　＜1月＞

<N0145>

ヤマノイモ（山の芋）

呼び名を整理すると、ヤマノイモは別名自然薯（じねんじょ）とも呼ばれている。ヤマイモと呼ばれているものは山に生えている芋と言う意味で品種名ではないが、ヤマノイモは山に生えているので、結局、同じものを指していることになる。

よく似たものにナガイモがあるがこれは別な種類のものであるが、長い形をした芋なので、ヤマノイモと混同されることがある。また、ヤマトイモと呼ばれるものはヤマノイモの一品種であり、丸い形の芋である。

ヤマノイモは雌雄異株で雌株に生る実は写真のような三つの陵があり、それぞれの中には円形の翼が付いた種子があり、冬の乾燥期に風によって飛ばされていく。林縁や人家近くの植え込みなどに自生し、芋は地下深くにまっすぐに伸び、1mを超えることもある。ヤマノイモ科のつる性多年草。

あいかわの自然誌　＜1月＞

<N0146>

ヒヨドリジョウゴ（鵯上戸）

冬枯れの野山でヒヨドリジョウゴほどみずみずしい光沢のある赤い実は見かけない。低山のハイキングコースや林道を歩くと、枯れ枝から垂れ下がっていてすぐ気づく。特に雪の後は真っ白な銀世界に真っ赤な実が映える。幸運な出会いに宝物を見つけたような気分になる。

まん丸い液果（えきか＝肉質で液汁が多い実）は、大きさもヒヨドリが啄ばむのには格好のサイズである。さぞかしヒヨドリにと思いきや野鳥には敬遠されているようで、容易には食べない。餌の乏しい厳冬期でも見かけることがある。

名前のゆわれは、酒飲み（上戸）の赤ら顔に見立てたという説がある。同じ仲間にマルバノホロシがある。ナス科のつる性多年草。有毒。